

Behind the Evolution of Modern Design: Unveiled Development of Housing behind the Iron Curtain

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): The 1929 WuWA Exhibition, The 1932 BABA Exhibition, Zlin, Bauerova villa, Chateau kotera 作成者: TSUKAGUCHI, Masako メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4103

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



モダンデザインの背景を探る —1900年代諸事情その10 旧社会体制に埋もれた中欧モダン住宅—

学芸学部 化粧ファッション学科 塚口眞佐子

要旨：1900年代初期の社会背景からデザイン史を読み解くシリーズの10稿目である。今稿ではビロード革命まで旧体制に阻まれ存在感が希薄であった中欧のモダン住宅事情を観察する。世紀転換期にまずウィーンで結実した前世紀の革新デザイン運動は、旧ハプスブルク帝国構成員のドイツ語文化圏が1つの核になり、これを牽引することになる。この時期に特徴的な、モダン啓蒙イベントである住宅博もこの地域でこそ特に顕著であった。ここから次世代のモダン住宅施主も誕生する。もとより10年代からアールデコの一翼キュビズム建築も花開いていた。先進の企業城下町を創設した社主も登場する。しかし、ナチスそして戦後の社会体制がこれらを没収・放置・荒廃せしめることになる。旧体制崩壊後四半世紀を経過して、ようやくに研究・視察環境が整い始めた。これらの事例観察によって、建築やデザインの背景への奥深い理解を深めたい。

キーワード：プレスラウ博、ババ博、企業都市ズリーン、アドルフ・パウアー邸、マンデリク夫妻邸

I はじめに

モダンデザインの発展経過を観るに、歴史様式の混乱状態が口火となり様々な思潮やフリースタイルが登場する。これに続く各地のキュビズム、未来主義、構成主義、表現主義、デ・ステイルなどが1920年代後半に現代に直結するメインストリームすなわち国際ショナル・スタイルに収束し波及に至る。これまでの9稿でこの展開を必然せしめた個々の事情を論じた。

しかし、一般に建築史で取り上げられる住宅事例はほとんどが西欧に属し、中欧に関する事例や情報はごく一部の突出した存在に限られ、その他は無きに等しい存在だった。第二次大戦以降ビロード革命の進む90年代まで約半世紀以上、存在としても研究対象としても無視されて来たのである¹。

1920年代以降のモダニズム進展期には、中欧各地でも建築での実験やライフスタイルでの実験が開花した。一方でこの地域に顕著な反ユダヤ主義とナチズムによるモダニスト芸術家弾圧(1933年及び38年以降)は、彼らの西欧への亡命とモダニズム進展という結果をもたらし、故地の中欧では潰えることになる²。続く旧体制による私的資産の凍結・没収・放置も災いした。旧体制下で裕福な高学歴知識層・ブルジョワ階級の受けた政治的迫害は、中欧モダン住宅の存在希薄化につながり、言うまでもなく冷戦による東西分断が情報の波及にとどめを刺した。1989年から中欧・東欧

に連続するビロード革命がようやく情報開示と歴史再発見の端緒となったにすぎない。

それらを鑑み、今稿ではモダン建築史の拡充を目的として中欧におけるモダン住宅の進展を探ることとする。グロピウスやル・コルビュジエ、ミースに代表される国際ショナル・スタイルの本流に収束しながらも、中欧は独自の文脈を持ちその豊穡さの点からも見るに値する。ローカルに終わったとはいえキュビズムの出現もアールデコ建築につながり、モダニズムの到来を先導する。早くからのエアロダイナミズムや流線型の具現化なども、モダニズムを視覚化させる。

■施主像の変遷

前稿では世紀転換期、および続く戦間期までのウィーンの施主を中心に観察した。世紀転換期にモダンを主導した街、その立役者となるユダヤ人を注視し、資金提供者としてアヴァンギャルドを強力に推進した群像や、モダン進展との関係を探った。高学歴・富裕層・一流人士ではあっても、マイノリティで不安定な存在からの脱却を希求し、前衛建築家の支援に光明を見、作品に自画像を託したのである³。反ユダヤ主義環境ゆえの、アイデンティティ希求への情熱が飽くなき支援に至らせた論じた。モダン萌芽の世紀転換期にアヴァンギャルドを必要とした精神は時代環境の産物であった。ユダヤ人のハートランドというべき中欧を取

り上げる今稿でも、彼ら施主の事例を概観する。

紀要第3巻と第4巻では周回遅れの状況の英国のモダン排斥傾向を観察した。30年代の代表的先進事例のほとんどが、施主・建築家ともユダヤ人（主に亡命者）であることにも注視し、社会背景とともに、ユダヤ性とモダニズムとの親和性を論じた。アヴァンギャルド建築は革新的・芸術的アイデンティティを視覚化・差別化させるディスプレイだったのである。

モダン住宅の波及過程では、このような施主の革新思想の表明というより、アッパーミドルの進歩的知識層（またそう標榜したい層）にまで展開を見せるようになる⁴。表明したい属性の時期的な変遷と重ねてこれまでの各稿で経過を観察した。今稿でも30年代前半の施主例が登場する。試験飛行を眺望する住宅を求めた航空機エンジニアと、航海イメージを求めた医学博士である。どちらも後述する住宅博から誕生した施主であった。モダン住宅を牽引し成熟期を迎えつつあったドイツ文化圏として、波及には不可欠な施主、つまり政治的革新性・特段の指向性が希薄になりつつある時期の施主である。加えて多様性を見せ始めるそれらモダン住宅像の変遷も多くを物語る。

■モダンデザインとドイツ文化圏

ペプスナーは古典書ともいふべき『モダンデザインの展開』で、1918年までのモダン運動を総括して、ただひとりドイツとドイツに依存する中欧諸国の独自の取り組みから、現代一般に認められている様式が生まれた⁵、と語る。確かに、中欧で活躍したアドルフ・ロースは早くも1908年に、装飾の否定（『装飾と犯罪』）を主張している。「これが後に正しく実践されたことは今日の建築が実証している」⁶と、伊藤哲夫は著作『ウィーンの近代建築をめぐる』においてロースのラディカル性とその伝播を例証する。このエリアの多民族混雑と自由主義、そして不安定化する社会という土壌は、いち早いモダニズムの進展に大きく作用したと言える。

実際的には、モダンへの重要な一步を直接に踏み出したのはドイツ工作連盟（1907設立）だった。大戦後の経済回復期に、連盟主催で住宅博覧会ヴァイセンホーフ・ジードルンク（1927）を開催する（論集47号参照）。税金を投じる市当局や産業界を巻き込んだ大規模な開催で、批判が大半とはいえ大反響を呼ぶ。この博覧会を総括すれば、一つの区画にベーレンス、グロピウス、コルビュジエ、ミース、シャロウン、J.J.P.アウトなど後に巨匠とされる建築家が参画し、

あらゆる点で、その後の近代建築の動向に決定的な影響を与えたとされる博覧会であった。

ここで出現した住宅は、大枠ではコンクリートとガラスのフラットルーフ、水平連続窓、装飾を排したホワイトボックスの集合体である。後にインターナショナル・スタイルとされる造形であったことは、建築の新しい造形言語に、国際的普遍的な共通コンセンサスが存在することを内外にアピールするものだった⁷。つまり、モダニズムが初めて実際の建物の集合体として視認され、ムーブメントとして可視化したのである。これまでの例はほとんどが計画にとどまり、準備開始期の25年当時は、散発的で孤立した存在だった。ここに、ヴァイセンホーフ・ジードルンクの歴史に於ける重要性が存在する。

後を追うように近隣各国で工作連盟が設立され、住宅博開催に至る。続く5年間で中欧の近隣6都市での開催という過熱ぶりである。翌年の28年にはチェコスロバキアのブルノにて新住宅博、29年にはドイツ領のヴレスラウ博、30年スイス工作連盟によるチューリヒのノイビュール・ジードルンク、32年にはウィーンとプラハで開催されている。それぞれはドイツと国境を接し、歴史・政治・経済・文化的にもドイツ支配圏であった。ここに埋没しウィーンより東の欧州では、デザイン史上キュビズム以外に存在感を持たない。しかし中核たるドイツ文化圏の一員として中欧を見ることは、モダン史に奥行きを付加する。

本稿では1章の「はじめに」に続き、2章以降で事例を紹介する。まず中欧で特に頻繁な住宅博の概要を観察する。初期の1929年のヴレスラウ（現ポーランド）博と最終時期の1932年のプラハのババ博の2例を取り上げる。ヴァイセンホーフ博をなぞり大衆動員をめざしたヴレスラウ博から、ある意味その成熟と合理化を見せるババ博に至るまでには、その間のモダン住宅に対する意識改革が進んだ様子が垣間見える。ババ博の合理化すなわち簡素化にはこの意識改革を頼みとしたフシが観察出来るのである。経済大恐慌も影を落とす。この2例の変化は饒舌である。続いて住宅博から派生した住宅3例を概観する。もはや教条的な機能主義ではなく、無理のないモダニズム住宅は施主の心をとらえた。それは住宅博の様相とリンクする。

3章では未来都市と呼ばれた企業城下町ズリーンの事例を概観する。スロヴァキア国境に近い地方都市である。終盤にはル・コルビュジエも携わるが、創業者の思想が大きく影響を与えた。中欧・東欧モダニズムの文脈と言ってよい。

4章では戦間期までの、中欧アヴァンギャルド住宅のここ数年の動きを紹介したい。これらの事例はプレゼンスを高める存在である。もとより網羅出来るものではないが、他例での今後の展望が類推できるものとなる。近年の動きを見ることはモダン建築の背景を探る本稿のグランドテーマに添うものである。

II 中欧における住宅博

II-1 The 1929 WuWA Exhibition

WuWA – Wohnung und Werkraum Ausstellung (The Living and Work Space Exhibition)

■住宅博そして工作連盟との関わり

戦後の住宅問題は、前世紀からの都市化・人口の都市集中の進行、居住状況への関心の高まり、最新の建設技術の応用これらが輻輳し、市当局や都市計画家や建築家が早急に取り組むべき喫緊課題の根幹となっていた。啓蒙の手だてとして、総合博覧会とでも言うべきヴァイセンホーフ・ジードルンクがまずシュトゥットガルトで計画された。モデルハウス群の建設・公開はその博覧会の一部である。経過を論集47号から再掲する

計画の推進者ドイツ工作連盟は広報こそが活動の中心であった。機関誌の発行を精力的に継続し、展覧会は啓蒙活動の主たるものとなる。戦前の14年にもすでに35万㎡の敷地に100万人を動員するケルン博を開催している。この年には有名な論争（デザインは自由な芸術か大量生産に向けた規格化か）が生じる。爾後、大量生産のための工業製品のデザイン革新を目指す方向となる。この方向性を打ち出した24年のプロダクト展は大盛況を納め国内各地を巡回する。図録の題名は『装飾のないフォルム 工作連盟展』とあり、パウハウスも初めて参加している。ミースがヴァイセンホーフ・ジードルンクの構想を抱いたのは会場を訪れたこの時、と言われていた。

一方で24年にはドイツ建築家協会内に改革派グループDer Ring (The Ring) が結成されている。守旧派に対抗する連帯だった。正式発足の26年には新メンバーも加わり、エリート建築家グループとなる。住宅博は次第にドイツ工作連盟とデアリンクを主体に（グロピウスら両者のメンバーは重なる）、改革シンパたる中道左派の地方自治体をスポンサーに展開されていく。

■ブレスラウ博の経過と概要

ブレスラウ博の概要をヤドヴィカ・ウルバニク の



撮影：著者

著作 *WuWA Living and Work Style*⁸ に準拠して概観する。

まず1925年にはドイツ工作連盟シレジア支部が発足している。ここでヴレスラウの若手建築家たちがH. ローテルバッハの指導のもと住宅博開催の理念を築き、これは地元芸術工科大学教授の建築家ハンス・シャロウンやアドルフ・ラディングに支持される。この2名は建築家としてヴァイセンホーフ博にも参画していたのである。ヴレスラウ博は市当局と工作連盟のイニシアチブでの開催にこぎつく。ベルリンの工作連盟理事会はラディングを同時開催の展示館内展覧会の実行委員長に、ローテルバッハを芸術監督に任命する。地元の商工博覧会委員会は博覧会の組織化を担当し、国立芸術工芸大学教授J. モルツァーンを広報責任者に任命する。ヴァイセンホーフと同じく官民協同体制であった。

ヴレスラウ（現ヴロツワフ）中心部からほど近い、緑豊かな緑地と建築美を体現する100周年記念ホール（1911-13 RC造として当時欧州最大、直径69m、高さ42mの円形建築）に接する清新な街区に、多様な企画が実施された。モデル住宅エリアは全体レイアウトをラディングとローテルバッハが担当し、建設はヴレスラウ住宅公社による。モデル幼稚園、集合住宅（18戸）1棟、独身者とカップル専用アパートメント1棟（44室と8室）、連棟テラスハウス1棟（13戸、これは6区画に分割され6名の建築家が担当した。床面積は48-90㎡の住戸が中心で、妻側には86-146㎡と広めの住宅が配された）。加えてやや高規格の独立住宅や2戸建ての17棟という規模である。（実施予定の5棟は建設されず、また独立住宅3棟は現存しない。）

住戸のタイプや面積を実証する実験的プロジェクトで、それぞれ異なる建築家に委託とし、ヴァイセンホーフ博同様に外国人建築家の招聘が計画された。しかし

高まりつつある外国人排斥・右傾化の風潮に市当局の賛同が得られず、国内の建築家のみ 11 名の参加となる。(ヴァイセンホーフ博では中道左派のリベラル連合が市議会を支配し、左翼的傾向を持つプロジェクトに寛容であった。そのため、スイス、フランス、オーストリア、オランダ、ベルギーの前衛建築家の招聘が可能であった。)

「住宅不足の改善のため入手可能な住宅の供給」をグランドテーマに、住戸は床面積を倏約し、経済的な工法での遂行が求められた。その中で参加建築家はそれぞれに解法を追求しながらも、寝室の個室化、リビングとダイニング・キッチンの接続などは共通の課題となった。中でも個室とリビングは日照のため東西軸に配置し、これは当時とても先進的なアイデアだった。棟ごとの担当建築家やその住戸内レイアウト・デザイン概要は割愛するが、庭園との連続性のためガラスの多用、広いテラスや屋上テラス、オープンな室構成と可動間仕切りの採用などは、ほとんどの住戸で見られる解法である。



シャロウンの独身アパート 撮影：著者

デザイン的には参加建築家の全く自由としたが、ほとんどは幾何学構成の機能主義建築であった。とはいえ画一的なインターナショナル・スタイルつまりフラットルーフのホワイトボックスは集合住宅やテラスハウス棟など 8 棟のみで、より多様性が見られた。幾何学構成とはいえエレガントな住宅が独立住宅を中心に 6 棟、シャロウンの独身者アパート作品に代表される流線型の建築は 4 棟存在する。切妻屋根の住戸も 2 棟あった(現存しない)。これは、流線型など新建築の

高コスト化は博覧会の理念に反するという当該建築家のアンチテーゼであった。

外構はランドスケープ建築家が担当し、建材は国立研究機関で、建築とハウジング経済というプロジェクトと共同開発された。工期は 3 ヶ月という期間ながら、すべてのインテリアは公開され入場可能だった。博覧会終了後はこの区画は造形芸術的区画となり、伝統派からはウルトラモダンと揶揄された。入居者は芸術大学の教員、建築家、音楽家や作家が中心だった。

モデル住宅以外の展示はヴァイセンホーフ博同様に多彩である。近接する 100 周年記念ホールでは、ドイツ建築家協会展・ドイツ工作連盟展・工科大学展・住宅供給公社展・バウハウス展が開催されている。貿易会館内では、設計過程・工事過程・新建材・塗装と色彩・新工法・建設機械・インテリアデザイン・家具や家庭用品・インテリア空間・外国の集合住宅例・職人の工房例(織物、ガラス職、家具の布張り、家具製作、美容家、写真家、装丁業)が展示された。

屋外のモデルショッピング街区では装備品が販売された。特別区画には建設機械、庭園、温室、ガーデニング機材、これらに加え動物が飼育されるモデル農場もあり、産品を展示した。また、モデル校庭や遊戯場・肺病の子供用のデイサナトリウム・人形劇場・週末用山小屋、また変わったところでは墓場アートの展覧会まであった。モダン住宅テーマパークとして家族が 1 日過ごせる、という集客を意識した展開だった。

II-2 The 1932 BABA Exhibition

■ババ博とは

ヴレスラウ博が開催されていた頃、その南東約 320km(道路行程)という近隣圏のプラハでも住宅博計画が進行していた。ババ博である。



撮影：著者

チェコスロバキア工作連盟の主導のもと、32年9月公開の住宅博で、17名の建築家による戸建住宅が最終的には計33棟立ち並んだ。連続する住宅博の終盤に位置する。ステファン・テンブルの著作 *The Werkbund Housing Estate Prague*¹⁰ に準拠し概観する。

チェコスロバキア工作連盟は オーストリア・ハンガリー帝国時代の1913年に設立されたチェコ工作連盟が母体の組織である。ドイツ工作連盟が近隣に繁殖現象を起こしたのである。戦後に独立を果たした直後の1920年に誕生している。

ババとは選定された地区の近隣の遺跡にちなんだ名称であり、これまでの住宅博と異なり名称に明確なイズムは込められていない。それは建築家のマニフェストとしての住宅博ではなく、施主との対話をベースに創造された住宅博であったことが大きい。つまりこれまでの住宅博と決定的に異なるのは、建設された住宅は予め施主が決定していたという点である。よってすべて私的資金で運営され、公金に負うものではない。結果として集合住宅は存在せず、大邸宅から小住宅までさまざまな戸建住宅のみの展示となった。併催展もパンフレット制作のためのグラフィックデザイン・コンペとその展覧会程度で、大掛かりなものは無く、客寄せ企画は皆無と言える。

1927年のヴァイセンホーフ博から5年を経過しての博覧会であり、施主参加の住宅博開催とは、この間に育ちつつあった先進的施主の意識変化も功を奏するが、経済環境、特に1929年の大恐慌による打撃も影響を与えた。加えてこれまでの教条的機能主義という住宅形体にも変化がきざし始める。

宣言された博覧会目的は、勤労者の生活の質向上をねらい、新工法、新平面計画、構造計画などが機能的で健康的な居住空間に寄与する、とうたわれている。新平面計画すなわち空間の連続性とオープンプランはフレーム構造と軽量建材を要求する。しかし施主たちはより伝統的なアプローチを好み、結果としてコンクリートのフレーム構造にマッシブなレンガが埋まった(ヴァイセンホーフでは、レンガは旧工法すなわち組石造の象徴として全く排除された¹¹)。建築家に及ぼした施主の直接的影響のため、モデル住宅は博覧会のコンセプトに忠実に添うものではなく、また前衛的な解法がすべてに採用された訳でもない。建築家と施主の妥協作とも言うべきババ博は欧州での住宅博の終盤期にあたり、モダン住宅の戦前での成熟期つまり中庸化の好例である。ここにババ博を取り上げる意味があ

る。

ことの始まりはやはりヴァイセンホーフ博である。同じくチェコ内のブルノ博(1928年)と並行し、28年にチェコ工作連盟は準備委員会を立ちあげている。しかし、直近のブルノ博では展示住宅の売却に困難をきわめた。このことが委員会メンバーに戦略シフトを促す。つまり事前の販売先確保である。たどり着いた案は、先進的なエリート層(芸術家、大学教授、経営者、起業家)の中から支持者グループをセグメントし、連盟が3世代に分けランク付けした建築家リストの中から建築家を選ばせ、協同し個々の希望に添った住宅を建てさせる、というものである。これはイズム主導からのパラダイムシフトとでも言うべき点であり、モダン住宅の展開には欠かせない道程であろう。

■ババ博の経過と概要

そこに至るには試行錯誤があり時間もかかった。工作連盟はまず29年に一流建築家パヴェル・ヤナークに敷地や配置計画を依頼した。彼の青写真には、連棟のテラスハウス住宅や2戸建住宅も含まれていた。もともとのコンセプトは規格化デザインをもとにした展開であり、住まい手像も一般的市民層であった。この線に沿って同年に、まずは実施を前提とした極小住宅のコンペを開催する。しかし優勝作の連棟住宅や2位の独立住宅、3位の「成長する住宅」を希望する施主は見つけられず、実現出来ずに終わっている。加えて実施に至らなかったのはすべて連棟住宅案、および4種の2戸建住宅案だった。施主は迷うことなく独立住宅を好んだのである。当初に想定した施主像は運営過程でより富裕層にシフトしてゆく。彼らは画一的な規格型住宅を嫌い、独自のデザインを求めたのである。

今回の建築家・施主協働方式は必然的に施主の好みを反映した住宅の出現となる。キューブ状の厳格な機能主義一色とはなり得ない。個々の住宅や建築家の解説は割愛するが、施主の状況に応じて、住居タイプも画家やデザイナーのアトリエ付き住宅などさまざまだった。協会に従わず、独自に建築家を選定した施主もいる。テキストスタイルデザイナーの施主は、ヴァイセンホーフ博でオランダ人建築家マルト・スタムの作品に感銘を受け自らが招聘する。唯一の外国人であった。このような施主の采配の自由性も、さまざまなニュアンスの機能主義住宅の登場につながる。参加建築家のキャリアも一様ではない。3世代に渡る建築家には50代後半のチェコ・キュビズムの長老格もいた。中堅世代にはル・コルビュジェ流ピュアリズムや機能主義を信

奉する層、20代後半からの若手世代はより柔軟な造形を試みた。結果として、もっとも厳格な機能主義住宅から、軽量感のあるエアロダイナミック・フォルムやオーガニックな住宅まで、大邸宅から小住宅まで、33棟は変化に富んだ。

大恐慌の影響で工事の遅延もあり、博覧会のオープン時に公開されたのは22戸だった。例外を除きほとんどが未完成でさまざまな工程段階にあった。空っぽのままの公開となったのである。ゆえに完成されたインテリアから暮しや快適性をイメージさせるのではなく、工法・技術面でのアピールが中心となる。柱や梁のコンクリート構造を露出し、断熱・吸音部材などを見学者に提示した。(現在でもこのような住宅展示手法は存在する。性能・工事など住宅への信頼性を醸成するが、生活イメージがわきづらく夢を描きにくい。よって購入意欲の誘導には不向きである。モダン住宅が初期段階にあった当時として、この展示手法は一般市民に対し訴求力があつたとは考えにくい。当然ながらこの手法は施主が予め存在しているからこそ有効であつた。イメージ喚起性と憧憬性つまり入居者獲得力を必須としない公開手法であり、逆に費用負担者である施主の理解と協力を得やすい手法だった。未完成でも公開に踏み切つたことは、こういった外的諸事情に加えて、背景にはモダン住宅への認識が一部の知識層には皆無・希薄ではなくなつた時期に来ていたことも窺えるのである。論集46号で述べた施主の意識変化は、この住宅博でも例証されると考える。)

博覧会開催には、これまでの住宅博と共通に、鋭い批判がわき起こる。論点はエリート層のブルジョワ建築であり社会問題への挑戦が見られない、というものである。一方で、エリート知識層や中流知識層にはブームを引き起こす。チェコの歴史地区やプラハ城を見下ろす100mの高台にあり、緩やかな南面スロープに並び立ついずれもホワイトの2階建て住宅は、眺望を優先し住戸の配置は熟慮されていた。スロープには3本の道路が平行に通じ、広い敷地にゆとりある配置は、住宅がいくつか建て変わった現在でも(大戦中プラハはドイツの占領地区となるも、連合軍からの爆撃を受けなかった)、当時の住環境の良さと品格・先進性を彷彿とさせる憧憬の住宅地である。

ヴァイセンホーフ・ジードルンクでも当初の中低所得者向け計画が中流知識層・ブルジョワ層対象の住宅博に変容した経緯がある。税金投入事業のため批判はより厳しいものがあつたが、結果的に住まい手は低所得層オンリーだったモダン集合住宅への意識覚醒の効

果があつたことになる。そもそもは住宅不足解消のための中低所得者住宅のための公営プロジェクトだったのである。それが芸術監督ミースの戦略もあり、いつしかターゲットとされる住まい手像が変遷し、揶揄されながらも憧憬の高級住宅が出現したのである。モダン住宅の波及そしてモダニスト建築家の活躍場面を増やすには、資金力のある施主の心をつかみ、憧憬の住宅誕生が必須だったのである。

II-3 独立住宅志向：住宅博があつた次世代の施主 ■ババ博と不況

博覧会はまさに大恐慌による経済危機の時代に重なる(回復が感じられるのは33年後半からである)。建設業・建築家は不況が直撃する業界である。仕事が減少する中、筆頭的建築家ジリ・クロハは建築家に、この時期を理論強化やコンセプト構築に充てるべき、と呼びかけた。自身もソビエト訪問後、ブルノ工科大学の学生とともに『居住状況における社会主義的断章』と題した書籍、労働者階級の住宅面積と居住状況を分析したものを出版している。一方で、クロハと親しい建築家カレル・ティーゲは『建築における社会学』を出版する。左翼の建築家を動員しての著作だった。20年代からのソビエトの実験に従い、家族の日常生活や家事・育児を集団化することで合理化出来るとして、集合住宅のアイデアの優位性を説くものだった。

そのような折、労働者住宅コンペがプラハでも複数の地区で開催されている。しかし審査団は生活集団化の提案は受け容れず、ノーマルなアパートメント案を採用する。この集団化論は左翼知識人にかなり多方面に議論されたものの、中流層にアピールすることは決してなかつた。彼らは引き続き庭付独立住宅を郊外に求めたのである。その中から次世代の施主が続出する。

チェコの若いインテリ層はモダン建築をライフスタイルの基本として受け容れた。自身のモダニティへの接近を体現すると見なしたのである。自然環境の中オープンエアで、無駄な装飾は無く、衛生に関する新技術は可能な限り取り入れるというものである。決して一様ではなくともホワイトを基調としたモダン建築は自分たちの志向性をアイデンティファイした。チェコ内、中でも第2の都市ブルノでも中心部の西にモダン区画が形成される。これら地方都市にも散在するさまざまなニュアンスのモダニスト住宅は、当時の若きエリート知識層の邸宅として、施主のプライドを体現したのである。

ここでババ博がきっかけになり誕生した実例を見る

こととする。例外的存在であったインテリアまで完成した住宅（博士の家）は、施主の心をつかんだ。建築家ラディスラフ・ザク（1900-73）にはこのような層から依頼が相次いだ。以下、いずれの住宅例も、概要は前掲書 *Great Villas of Bohemia, Moravia and Silesia*¹² に準拠した。

■航空機エンジニアの家



撮影：著者

施主ミロスラフ・ハジン（1894-1963）は後にチェコ工科大学教授となる航空力学エンジニアで航空機工作所の共同社主でもあった。空軍の主力戦闘機の複葉BH シリーズを開発する。工事はババ博の翌年に実施され、施主建築家ともに30代だった。

ハジン邸には博士邸と共通コンセプトで、南面に長くのびたリビング、上階には船のキャビンのような3寝室（ビルトイン・クローゼット付）とバスルームが南面し、エンドには妻の化粧室があった。リビングにはコーナーに談話スペース、ダイニングは2段持ち上げるなど変化を持たせながら、視覚的連続性はキープされた。ここからガラス張りの冬用室内庭園に至り、屋根のかかった屋外テラスに出る。夏のダイニングでもあった。フラットルーフはアッパーテラスと称し、プライベートな場となる。特徴的に、BH機の試験飛行が展望できるキャプテンブリッジが屋上に突き出して設けられた。キャンティレバーでもたせたフレームが大きく張り出し浮遊感を醸す。これが全体に複葉機のような様相を生み特徴的フォルムとなる。

家具や照明器具などインテリア細部までデザインし完成度は高い。チェコのここ10年の最も美しい機能主義住宅の1つとして海外（英国、フランス、アルゼンチン）の専門誌に掲載される。チェコの戦間期におけるベスト作品のひとつともなる。

■貿易商の家と医学博士の家



医学博士の家 撮影：著者

1929年のヴレスラウ博も施主の心をとらえている。17棟のうち3作品が即座にヨーロッパの建築誌に掲載された、いずれも博覧会の立役者である著名建築家ジャロウンの独身者用アパート（カーブを描く博覧会でもっともエキサイティングなデザイン）、会場展示の実行委員長ラディングのメイン企画ともいべきタワー棟の集合住宅、工作連盟シレジア支部代表ローテルバッハの家具・インテリアまで手がけた独立住宅作品だった。

この独立住宅がヒットした。まずは一流貿易商が自邸をローテルバッハに依頼する。ヤプロレツ・ナド・ニソウ（現チェコ）の貯水池を望むスローブに、ヴレスラウ博でのコンセプトを援用する。L型構成で、2棟の連結部にはガラスブロック壁がアールを描いて立ち上がり、エントランスホールとなる。中では廻り階段がメイン階へ導く。メイン階はダイナミックなリビングが水平に広がり、ここでも端部は半円形のダイニングに至る。L型構成によるプライベートと社交のエリア文節も好ましかった。シークエンス性の豊かな平面プランの魅力は現代の豪邸と変わらない。評論家たちはヴレスラウのもっとも美しいエアロダイナミック機能主義の力作の1つと称した。

この住宅は即座に同じ市内の医学博士の家を呼ぶ。同じく斜面に建ち、道路ファサードは開口部を切り詰め水平感を強調し、南面のガーデン側は、主要階のリビングのほぼすべてがガラス貼りでガーデンとつながる。ローテルバッハはディテールの隅々までデザインしている。貿易商の家と違って構成はシンプルに直方体で、それだけに丸窓や船窓、小窓、廻り階段、ビルトイン家具の多用などで、船舶の航海イメージを打ち出せている。この航海イメージというのが、20-30年

代のモダン住宅の代表的形容の1つであった。船舶は機械すなわちモダニティを象徴し憧景的な形容でもあり、住宅らしくないことを揶揄する批判的形容でもあった。この住宅も航海イメージを表現したエアロダイナミック機能主義の総合芸術作品と称される。

以上、住宅博に直結した独立住宅3例をごくかいままで見て来たが、構成や外部との連続性など、現代住宅の理想像と相似と言ってよい。施主像も初期の芸術界周辺や左派の富裕層また明確なイデオロギイを持つ層から、富裕なエリート知識層一般にと広がりを見せている。

III 未来都市グリーン

この時期の社宅としてのモダンアパート群は、ベルリンのゾーメンス社などいくつか著名であるが、グリーンほど大規模で完結した存在は例がない。ここにはパチャ社のオフィス、工場、住宅、デパートやホテルなどの厚生施設までモダン建築が揃った。チェコやポーランドでは経営者が従業員住宅や厚生施設の開発に乗り出す例が随所で見られる。この分野はもっぱらロバート・オーウェン（1771-1858）によるユートピア的共同体構想など世紀転換期頃までの英国の展開例に範を求めるのがこれまでの通例であり、現存する街並も多く研究も豊富である。パチャ社の創業者も確かに英国のガーデンシティ運動に共鳴していた。しかし中欧の事例は紹介されることがなかった。生活環境を丸ごと開発するという先進的な取り組みは、辺境でこそ全う出来た環境にあったと言えるだろう。

■企業城下町グリーンとは

田舎町から1世代のうちに、1930年代半ばまでには未来都市へと変貌を遂げた街グリーン、パチャ社の企業城下町だった。終盤の35年にはル・コルビュジェも基本計画に携わる。20年代半ばには、すでにプラハ、ブルノに次ぐモダン建築の中核地になっていた。しかしグリーンという事例は国際的に知られておらず、チェコではキュビズム建築のメッカで首都のプラハ、そしてミースの代表作のある第2の都市ブルノ以外の地方都市の建築に関する情報はきわめて乏しい。

■パチャ社とは

街の成長はひとえに創業者トマーシュ・パチャ（1876-1932）の功績である。彼は1932年の不慮の飛行機事故で亡くなる（悪天候による自家用機事故）。彼の業績や事情を増田幸弘著『黒いチェコ』¹³（2015）



当時が現存するグリーンの街 撮影：著者

に準拠して概観する。

1894年に18歳で家業の製靴業から独立を果たし、自身で靴工房を起す。3年後にはチェコで10指に数えられるメーカーに成長する。工員として渡った1904年のアメリカ修行で大量生産と経営合理化を学ぶ。帰国後、3階建ての工場を新設する。この頃、従業員1500名は街の総人口の1/2に達したという。9年後の再渡米とフォード社システムの学習などが更なる飛躍をもたらす。学んだベルトコンベア方式を欧州でもっとも早く取り入れ、物流庫はペーター・ペーレンスに設計させている。軍需生産も奏功し、大戦終結時には4,000名の企業に成長していた。

国家独立後の不況と政変による打撃を打開するため、アメリカやヨーロッパ内はもとよりアフリカまで、世界的規模で海外進出を展開する。もはや靴メーカーではなかった。社宅建設に必要な資材、工場用発電所から生活物資まで製造は多岐に及ぶ。最終的には航空機やプレハブ住宅製造計画まで手がける。経営も冴えを見せる。高金利の社内預金は資金調達に貢献し、福利厚生になる。調査部門では技術革新を進め、機械化による生産性向上、広告宣伝の活用など経営手腕は亢進する。現在にも通用する例として、ドルでもユーロでも19.99や29.99という価格表示を見かけるが、この考案はパチャによるものである。週休2日週40時間労働という労働環境の整備、食堂・食糧や生活物資の割安な販売といった高レベルの福利厚生も充実した。パチャや自社の拡大のみを追求したのではない。グリーンを豊かにし、誕生したばかりのチェコスロバキアの発展に努める。23年には市長になり、緑豊かな職住接近の都市計画に着手する。

■企業城下町グリーンその概要

グリーンは規模的にはヨーロッパのデトロイトと称

されるまでに発展を見せる。パチャ社は旧市街の西側に工場群 53 棟とオフィス群を集中させる。中には地上 16 階、77.5m のタワー棟も 1935 年に建設される。これは当時欧州で RC 造としては最高層だった。現在ではグリーン州庁舎となっている。福利厚生施設群では、大型のパチャ病院（最新設備を完備し 1927 年当時もっとも先進的な病院の 1 つとされ、従業員は 6 ヶ月ごとに定期健康診断を受けた。）、東側と南側には社宅群（レンガ造のキューブ型、ほとんどが独立住宅で、4 室で床面積 56㎡から家族数に応じ拡大する。）が建設された。デパートや大型映画館（1932 年 2580 席でヨーロッパ最大級、9m×7m のスクリーンも同じく）、百貨店や低価格の食堂群、大型ホテル、スポーツセンター、図書館などがこれに続く。高レベルの福利厚生・高給料・安い生活費という厚遇に入社希望者が殺到したという。社内労働学校（1925）も特筆もので定時制高校の役割を果たし、特に優秀な勤労者が送られ経済や財務管理、外国語などを学んだ。

ナチスの侵攻で創業者一族はカナダやブラジルへ亡命するも、軍需生産が奏功し操業は持続された。戦後の共和国政権はドイツに戦争協力した企業の国営政策を進め、パチャ社は接収され国営となる。体制崩壊後の民営化以降も経営はふるわず 2000 年に倒産する。共産主義下ではパチャは資本主義の体現と見なされ、徹底的に存在の消滅が図られ、街の名も変更された。国有化された企業の実業家とりわけ亡命者をメディアが取り上げることは御法度だった。市民も密告を恐れ話題には出来なかった。しかし、福利厚生施設群のほとんどは市民によって現在も利用されている（パチャ社は現在スイス・ローザンヌに本部を置き世界展開をしている）。

これらの建築には住宅、業務を問わずモジュールシステムが採用された。標準化によるコスト削減の目的だった。パチャ社の建築部門で働く地元の 2 名の建築家を中心に担当した。1 名はル・コルビュジエや F.L. ライトのもとで学んでいる。

■独立住宅こそ

『黒いチェコ』から創業者トマーシュ・パチャの社宅概念を引用する。「家は草木、庭、そして樹木に囲まれていなければなりません。一軒一軒の家がそれぞれに玄関を備え、隣家と完全に独立してはなりません。家族向け住宅には空調システム、電灯、浴室が不可欠です。週あたりの家賃は、工場での賃金 2 時間分を超えてはなりません」とある。

彼は英国のガーデンシティ運動に共鳴し、またアメリカのモデル産業都市構想にも意を強くしていた。早速に従業員用住宅の計画を進める。ナチス体制までにグリーンに 2,500 軒が完成している。あくまで独立住宅が中心だった。パチャは大規模賃貸アパートには大反対だった。採光や通風といった衛生環境にとっても、精神的にも独立住宅が好ましいだけでなく、政治的理由もあった。集合住宅かどうかは別としても、賃貸住宅は社会的に不安定のもとで、左翼運動出現の危険性をもたらすとも考えたのである。グリーンからその危険性を排除したいと願った。テラスハウスさえ嫌った。シンプルな 2 階建ての持ち家独立住宅こそが理想の社宅だった。その建設コストは従業員の年収を超えてはならないとした。それゆえ建設・内装は基準に明確に合致するよう求めつつ、コスト管理への最大の注意を求めた。そのような徹底したローコスト路線も変化を来す

30 年代には役員層、エンジニア、医師などに向けた高級社宅が建設されたのである。この方向へのベクトルは社宅一般に向けた国際コンペ（1935）がきっかけとなる。社長で創業者の義弟ヤンが取り仕切った。9 カ国から 289 作の応募があった。審査員にはチェコの一流建築家に加えル・コルビュジエも参加する。4 作が入賞し 17 作品が佳作とされた。ヤンは入賞作からスウェーデン建築家の最小限住宅とチェコ建築家の 2 戸建て住宅、および佳作 2 作品をモデルハウジングとして実施する。

一方、審査員のル・コルビュジエはこれを好機に独自にアパート棟 7 案をプロポーザルする。しかし予算を過度に超過し、アパート案は実現しなかったが、ヤンは彼に都市計画一連といくつかの業務建築を委託する。しかしながらこれも 30 年代後半においても社の要望とはあまりにもかけ離れた内容だった。

このル・コルビュジエ・ショックともいべき空気の流れか、中流層の購入者向けの住宅開発が進み出すのである。しかし、これもナチス体制（1939-）では英国のマナーハウスのような豪壮な邸宅という伝統建築に戻ってしまうことになる。

IV おわりに

ここ数年、戦間期中欧アヴァンギャルド住宅の露出がめざましい。これまで個人邸など住宅建築は、ミースのトゥーゲンハット邸（1928-30）やロースのミューラー邸（1928-30）以外はあまりにも知られてこなかった。冒頭で述べたように歴史に埋もれ、紹介されるこ

とがほとんどなかったのである。

その住宅状況を探るため、チェコに現存する1900年代から39年までに建設された邸宅70戸の2010年現在までの経過を、前掲書 *Great Villas of Bohemia, Moravia and Silesia* をもとに精査した。その結果、半数を超える39戸が戦後に国家による没収を受け、共産党施設や地方自治体施設などとして使用変更されている。このうち24戸は戦前にすでにナチスに奪取され警察本部・幹部の住居などとしても使用されていた経過がある。戦後のナチ資産追求、またマイノリティドイツ人追放の動きの中で、これらも国有化に至った。ビロード革命（1989）後は元の権利相続者に返還され、そのほとんどは売却されることになる。それらが時機を得て、建築を活かしミュージアムやレストラン、ホテルなどに変貌し、メディアに登場し始めている。個人所有者（当初の施主からの購入者も含む）の保有が建設当初から現在まで継承出来た例は70戸のうち11戸に過ぎない。残り20戸は経過不明である。

このように国家権力による奪取が、住宅としての存続を終わらせたのである。モダン建築思想によるデザインゆえに、公共施設への転用に好都合であったことも影響した。実際に転用用途として目立つのがサナトリウムや医療施設、図書館や保育所、博物館などの地元自治体の関連施設である。上記トゥーゲンハット邸（1928-30）はナチス軍需産業の社交場、また大空間であることから戦後は体操スクールなどに転用され、ミュラー邸には装飾美術館の編集室や共産党中央委員会が陣取った。

東西分断時代からすでに文化財として登録されている住宅も少なくないが、上記バチャ社の例で存在の消滅が目されたように、私有財産としての来歴が派手な露出を妨げることにつながったと考えられる。これらの中から多数を実際に現地検分し、その中から公開されている2例を紹介したい。

■キュビズムの館アドルフ・パウアー邸（1912-1914）とは

キュビズムの代表建築家・20世紀の巨匠ヨーゼフ・ゴチャール（1880-1945）設計の邸宅で、プラハの東70kmほどの田園地帯に存在する。2008年にいったん公開の後、修復の第2フェーズがノルウェー・アイスランド・リヒテンシュタイン各国の補助金で開始し、完璧な姿での公開に至る。キュビズム邸宅ミュージアムとしての完成度・充実度は他に比べるものがない。ミュージアム発行の *BAUEROVA VILA*¹⁴ や前掲書



撮影：著者

から準拠し概観する。

戦後からビロード革命後の90年代終盤までは地元の行政機関が設置され、1987年にはすでに登録文化財としての地位を得ていた。しかし老朽化が進行する中2002年にチェコ・キュビズム協会がほとんど奇跡的に入手し、修復が始まり現在に至る。そこには歴史に翻弄された経過がある。大戦中の41年にはナチスがユダヤ資産として没収し終戦までナチス幹部が暮らす。戦後は逮捕・国外追放の処分を受ける。一連のユダヤ資産返却事業の過程で、相続人は地元への売却を決断する（パウアー一家一族は44年にアウシュヴィッツにてホロコーストにより消滅）。共産主義時代には地元の党幹事長と医師の住居でもあった。

おもしろい事実がある。施主アドルフ・パウアーは積極的に先進的建築を依頼したものの、実のところ好みは伝統的だったという。しかも巨匠に依頼したのは1912年で、当時は土地のリース権こそ保有していたものの所有権入手は1923年である。借地しかも都市環境ではなくキュビズム建築には場違いともいえる田園地帯にキュビズムをリクエストしたのである。当時のチェコではもっとも先進的建築であった。

このようなパウアーの人物像、また施主と建築家の関係を示す資料は20世紀の大混乱またジェノサイドの嵐の中で消失し、施主にキュビズムについて一流建築家に依頼するほどの知識があったかも不明である。それでもアヴァンギャルド建築を誕生せしめた強い意思は明確である。これまでの拙稿で自身の好みを超えて前衛建築を選択したユダヤ人施主像を多々観察して来た。重複は避けるが、この時代に顕著なアイデンティティ希求への強い葛藤が動機となったことは明白である。

それにしてもこれほどのパウアー邸が現在でもほとんど知られていない現実、及び公開に至った経過を鑑

みると、歴史が及ぼした影響の重さをあらためて感じるのである。

■シャトー・コチュラ；マンデリク夫妻邸（1911-13）とは



撮影：著者

上記パウアー邸に近いラトボアの田園地帯に邸宅ホテル、シャトー・コチュラが存在する。設計者ヤン・コチュラの名にちなむ。チェコを代表する建築家でゴチャールの師匠にあたる。名称からイメージするようにややクラシカルな構成の豪壮な館（3兄弟の住まい）で、インテリアにモダニズムが溢れる。2004年に高級ホテルとしてよみがえる。

モダニズムがインターナショナル・スタイルに収束する前の1910年のこの頃、中欧におけるアヴァンギャルド建築シーンは、ドイツ表現主義、チェコ・キュビズムなど極度に分極化が始まった時期である。その中でコチュラはタイムレス・イディオムとも言うべき古典主義を援用する。土地の歴史的文脈を踏まえ、自らの社会的地位を体現する現代の邸宅をという施主の要望に添い、村長の役割にも応じられると判断された。象徴性を持たせたクーポラを持つ中央棟と両ウィングという構成である。伝統的な平面計画とバランスを取るため、装飾デザインには幾何学モダニズムやキュビズムが多用された。特に左官仕上げ、照明器具や家具、グリルワークなどには極端ともいえるモダンデザインが施されている。中には「装飾は罪悪」で有名なアドルフ・ロースのデザインした家具も備わる。

この館で施主兄弟（化学エンジニア、村長、農業経済学者）は政治や文化、ビジネス・金融界の著名人を招き講演会を行う。その中には初代大統領の子息で後の政治家・外交官となるヤン・マサリク（1886-1948）や画家、オーケストラ指揮者など著名人が居並ぶ。施

主は砂糖精製業（伝統的にユダヤ系が目立つ領域）や穀物貿易で財を成した家系で、鉄道の筆頭株主、数社の役員も務める。先代は財団を設立し慈善事業を継続、『葬儀はチャリティの場に』との遺言を残す。

ナチスがボヘミア占拠後、一族は亡命し館は奪取される。弟はアウシュヴィッツに移送されながらも生還した。しかしチェコ解放直後には、館は追放前のドイツ人拘留キャンプという悲劇の時期を迎え47年には村の小学校となる。旧体制消滅後、1992年に子孫に返却され子孫は売却、2004年にキュビズム・インテリアを活かした高級ホテルとし修復・再生という経過をたどる。

これら以外では、外観は保存されつつもインテリアは大幅に改変されている事例も多い。内外ともに当時の姿をとどめた価値ある事例としてこの2例に限って紹介した。これらに準ずるものは地方都市にも散在し、アプローチも可能で、今後ますますの露出が期待される。それらが相乗してモダン住宅の歴史に新たな光を投げかけることを期待したい。

引用文献

- 1 Slapeta, Vladimir, *Great Villas of Bohemia, Moravia and Silesia* FOIBOS BOOKS 2010 pp. 254-294
- 2 塚口眞佐子『戦間期英国におけるコスモポリタンの活躍 2』大阪樟蔭女子大学研究紀要 4巻 pp. 99-100 2014
- 3 塚口眞佐子『1900年代東欧ユダヤ人のアイデンティティ希求と重ねて』大阪樟蔭女子大学研究紀要 4巻 p. 122 2016
- 4 塚口眞佐子『モダンデザインの背景を探る』p. 152 近代文藝社 2012
- 5 ベヴスナー、ニコラス、白石博三訳『モダンデザインの展開 モリスからグロピウスまで』みすず書房 1957, p. 111
- 6 木村直司編『ウィーン世紀末の文化』東洋出版 1993より伊藤哲夫『世紀末ウィーンの近代建築の成立をめぐる』p. 109
- 7 Kirsch, Karin, *The Weissenhofsiedlung* (New York: Rizzoli International Publications, 1989)
- 8 Urbanik, Jadwiga, *WuWA Living and Work Space*, Wroclawska Rewitahzacja Spolka, 2014
- 9
- 10 Temple, Stephan, *The Werkbund Housing Estate Prague* Birkhauser 1999

- | | |
|---|---|
| <p>11 Joedicke, Jurgen, <i>The Weissenhofsiedlung Stuttgart</i> p. 121, Karl Kramer Verlag 1989</p> <p>12 Slapeta, Vladimir, <i>Great Villas of Bohemia, Moravia and Silesia</i> FOIBOS BOOKS 2010 pp. 372–374, 367–371, 234–238, 221–225</p> | <p>13 増田幸弘『黒いチェコ』pp. 178–197 彩流社 2015</p> <p>14 VAUEROVA VILA <i>museum & galerie. Kubistickho designu</i>, Kontakt: Nadace ceskeho kubismu</p> |
|---|---|

Behind the Evolution of Modern Design: Unveiled Development of Housing behind the Iron Curtain

Faculty of Liberal Arts, Department of Beauty and Fashion Studies
Masako TSUKAGUCHI

Abstract

This paper, 11th issue of the serial work, reports social and cultural circumstances surrounding the modern housing development in Central and Eastern Europe which has just been unveiled only after so-called velvet revolutions in 1990's. This area especially Czech, within German sphere of cultural influences, was entitled to one of the pioneers among the modern movements. A lot of housing exhibitions: educational activity toward modern dwelling for citizens, were frequently held in this small area. 2 of them are studied in this report; one is the 1929 WUWA EXHITION in Wroclaw and the other the BABA EXHITION in Prague. Here also came out an innovative-minded corporate founder who brought an advanced life/work model town Zlin. The Nazis and following political structure, however, had made these contributions toward modernism black out. Behind the Iron Curtain there caused abandonment, devastation and oblivion on modernism heritages. Only after 1990's study and inspection on private basis became available. As time passes since then some villas are open to public some are for commercial use. Considering these social influences on modern housing will furthermore the study of design history rather slanted to Western Europe up to now.

Keywords: The 1929 WuWA Exhibition, The 1932 BABA Exhibition, Zlin, Bauerova villa, Chateau kotera